

自治大卒業生の声

自治大学校卒業生（第2部課程第211期）

南部町 企画財政課 米内 聡

編集者注：本稿は、自治大学校における研修の特長などについて、自治大学校の卒業生が記したものです。

1. はじめに

私は令和8年5月22日から8月7日までの約2か月半、自治大学校第2部課程第211期にて研修を受ける機会をいただきました。日々の業務に追われる中で、これほど長期間、自らの研鑽と自治体運営の本質を見つめ直す時間を確保することは容易ではなく、全国各地から集まった仲間と学び、寝食を共にした日々は、地方行政に携わる者としての視野と、一人の人間としての価値観を深める貴重な経験となりました。

研修期間中には後期自治会長も務め、同期の意見の取りまとめや行事の調整を通じて、多様な立場の人々をまとめていく難しさと責任の重さを実感するとともに、行政職として必要な調整力や対話力を改めて考える契機となりました。本稿では、その視点も交えつつ、入校前の心境から学び、生活、そして研修を終えた今の思いを振り返ります。

2. 入校まで

入校が決まってから研修開始までは、期待と不安が交錯する時間でした。2か月半にわたり職場を離れるため、担当業務の引き継ぎや後任者との調整には想像以上の時間を要し、周囲の理解と協力がなければ研修参加は実現しなかったと強く感じています。

令和8年5月22日～6月11日の法制基礎研修コースは受講しておらず、入学式とオリエンテーションのみ参加した後、一度

自治体に戻り、途中からの合流となりました。既に3週間を共に過ごした同期の輪に加わる緊張はありましたが、合流初日に温かい声掛けや気さくな歓迎を受け、不安はすぐに解消されました。出身地も担当業務も異なる仲間が、同じ志を持って集ったのだという一体感を、早い段階で強く感じることができました。

3. 自治大学校での学び

第2部課程では、地方自治・財政・交通政策・DX政策など幅広い分野を、第一線で活躍される講師陣の講義と演習を通じて体系的に学びました。断片的にしか捉えられていなかった制度の背景や理論的枠組みを学び直し、行政運営の全体像を俯瞰する視点を得られたほか、財政運営や自治制度の講義では、自らの自治体の状況と照らし合わせることで、これまで当たり前としてきた業務の意味を捉え直す契機となりました。

中でも印象深かったのが、班別の政策立案研究です。私は第3班に所属し、地域における社会的孤立の予防をテーマに政策提案の検討を行いました。出身自治体も専門分野も異なるメンバーだからこそ多角的な視点がぶつかり合い、議論は連日白熱し、時には夜遅くまで続くこともありましたが、互いの経験や知見を尊重しながら一つの方向性を模索する過程は、行政職としての協働のあり方を体感する貴重な機会となりました。

他自治体の先進事例を参考に、現場感覚と政策論を行き来する作業は苦労もありましたが、非常に刺激的な経験でした。最終発表に向けて資料を練り上げる過程では、講

師陣や他班からの助言により多くの気づきを得られ、自分自身の実務のあり方を見つめ直す契機となりました。

こうした学びを通じて、自分自身の中で最も大きく変わったのは、物事に対する姿勢そのものです。以前は目の前の業務をこなすことで精一杯で、新たなチャレンジや施策の提案を考える余地はほとんどありませんでしたが、この研修を経て、常に「なぜこうなっているのか」「どうすればより良くなるのか」を考え続けるマインドが自然と身につき、凝り固まっていた頭がほぐれていくのを感じました。失敗を恐れず新しいことに挑戦しようとするチャレンジ精神も、この研修を通じて確かに養われたと実感しています。

4. 自治大学校での生活

研修生は北海道から鹿児島まで全国各地から集まった計40名で構成され、方言や地域の話で盛り上がる寮生活は、まさに「日本の縮図」のようでした。談話室での何気ない会話からそれぞれの地域が抱える課題や取り組みを知ることができ、公私の垣根なく語り合える環境に身を置けたことは、自治体職員としての視野を広げる貴重な経験となりました。

休日には有志で東京観光にも出かけ、都心の街並みや名所を巡る時間は良い息抜きとなり、仲間と過ごす何気ない日常の積み重ねが、かけがえのない思い出となっています。

忘れられない出来事もありました。令和8年7月28日、熊本県で地震が発生し、宇城市の職員であった同期が急遽地元へ戻ることになったのです。つい先ほどまで同じ教室で肩を並べていた仲間が、地元の状況を案じながら慌ただしく荷物をまとめ、寮を後にする姿を見送ったあの日のことは、今でも鮮明に記憶に残っています。全国か

ら集まった仲間だからこそ、こうした出来事も他人事ではなく、それぞれが自らの地域に思いを馳せ、有事の際に住民の生命と暮らしを守り抜くという地方公務員としての使命を、改めて強く胸に刻む機会となりました。

5. おわりに

2か月半にわたる研修を終え、振り返ればあっという間の日々でした。講義で得た知識、班研究を通じて鍛えられた政策立案の視点、そして全国の仲間とのつながりは、これからの職務にとってかけがえのない財産です。

この研修は、長期間不在となる私を快く送り出してくれた職場の上司や同僚があってこそ実現できたものであり、日々の業務を支えてくださった皆様には、感謝してもしきれません。職場を離れる不安や業務調整の大変さを乗り越えてもなお、それ以上の学びと出会いをこの研修から得ることができたと、自信を持って言うことができます。

今後は、この研修全体を通じて得た知識や視点、そして立場の異なる相手と粘り強く議論を重ね、合意形成を図っていく力を、日々の業務の中で具体的に活かしていきたいと考えています。全国に広がった同期とのつながりも、今後の心強い財産です。関係者の皆様、そして第211期の仲間たちに、心より感謝を申し上げます。

